

日本の女性語形成の要因

——女性語形成を促進させた歴史的・社会的要因についての考察——

塹江 美沙子

1. はじめに

日本の話し言葉は世界の言語の中でも男女差が著しいといわれている（阿部 1998）。しかし、日本の女性すべてが敬語を中心とする、男性より丁寧な表現や、女性特有の終助詞を用いているわけではない。女性の話し言葉は時代・階層・教養をはじめ、地域・職業・個性など、話者の様々な条件によって異なっている。そこで、どのような条件のもとで女性特有の表現⁽¹⁾が話し言葉に現れるのかを調べてみたい。

調査対象は明治の文学作品とした。現代でも通用する「の・よ・だわ・ねえ」などの女性特有の終助詞は、「明治の中頃以降から、上下を風靡して流行普及を見たもの」（真下 1966 : 59）と言われているからである。また、この頃からは写実主義の概念も浸透しはじめ、それによって、当時の女性の話し言葉が色濃く作品に反映されていると思われるからでもある。

そこで、作品中の登場人物が「女性語を使用しているか／していないか」を調査した上で、それぞれ使用・非使用の理由を、話者の状況に則して考察してみたい。それによって、日本の女性語形成を促進させた歴史的・社会的要因に迫ることができるのではないかと考える。

2. 女性語形成の要因

「女らしさ」「男らしさ」は、長い間、生物学的に生まれつき備わったものと考えられることが多かった。しかし1980年代以降、「ジェンダー概念」が採り入れられることによって、それは近代の産物であり、社会的・文化的に構築されたものであると理解されるようになってきた。そこで、話し言葉に男

女差が生じたことも、ある「特殊な歴史的起源」を有し、「特殊な社会的状況」の中ではなくまれてきたものであると考えられる。

ここでは日本の女性語がどのような「特殊な社会的状況」のもとで形成されてきたかに焦点を当て、具体的な作品に則して考察していきたい。

以下、明治時代の小説の中で、主な登場人物が女性語を使用しているか否かを調べ、それがどのような状況下におけるものかを検討していくことにする。なお、この調査では「女性語」として、「女性特有の終助詞」を中心にしているが、「敬語」の使用についても調査した。

3. 文学作品における登場人物の女性語使用／非使用 についての考察

表1は女性語使用の変遷を明治時代の作品から抽出し⁽²⁾、調査したものである。左側には女性特有の終助詞を使用していない人物を、右側には使用している人物を挙げた。女性特有の終助詞を使用している登場人物には○印(そのうち「てよ・だわ言葉」⁽³⁾が認められる者には◎)を、女性特有の終助詞の使用が認められない者(あるいは、ほとんど認められない者)には×印をした。また、女性による書生言葉(男性語)の使用には●印を付した。そして、敬語の使用者には△印(そのうち「遊ばせ言葉」も使用しているものには▲印)を付した。他に、話者の住む地域・出身階層(結婚などで階層移動している者については元の階層)・世代・「話し相手との関係」を示している。

3.1 女性特有の終助詞を使用していない登場人物についての考察

表1の左側の女性特有の終助詞非使用者を概観すると次のようになる。

- 1) 東京・地方ともに「下流階層」が半数以上で、それらの話者の身分は(元)娼妓・(元)芸者・芸者(見習い)・子供・婆・元「俳優」など
- 2) 職業婦人である看護婦
- 3) 地方の農婦、大工(棟梁)の妻
- 4) 上流階層の伯爵夫人
- 5) 息子へ話しかける母(但し4例のうち「女性語使用者」にも1例有り)

フ	地方・中流	母	息子	『田舎教師』	×	フ	M42	地方・中流	妹	兄	『田舎教師』	◎
M42						△		地方・下流	妻者：小瀬	幼馴染		◎
						△		東京・中流	妻	夫	『それから』	◎△
ホ	地方・下流	娼妓：お三重	客	『歌行燈』	×	△	M43	東京・中流？	母親	息子	『裸走まで』	◎△
M43						△		地方・中・上？	お雪とお福	語り手へ		◎△
						△		お種	お種	姉妹の会話		◎△
ミ	地方・下流	農婦たち	顔なじみ	『土』	×	△		お種	お種	三百(弟)		◎△
ム	東京・下流	釜子の卵	刺青師	『刺青』	×	△		お銀	お銀	徳村・後の夫		◎△
モ	地方・下流	手伝い婆	主人	『懺』	×	△	M44	地方・下流	娘：お銀	徳村・後の夫		◎△
モ	東京・上流	母	息子	『お目出たき人』	×	△		東京・上流	女学生	仲間		◎△

注

1：選出した作品は、高校生用の教科書、東京書籍『現代文』（平成十二年度版）付録「文学史年表」（pp. 310-313）に基づく。

2 (1) その内、次の作品を削除した。

- ・ 翻訳小説
- ・ 戯曲
- ・ 文語文で書かれた作品 『経国美談』『佳人之奇遇』『舞姫・うたかたの記』『風流仏』『滝口入道』
- ・ 調査対象となる女性の話し言葉が乏しい作品 『坊っちゃん』『ふらんす物語』
- ・ 複数の短編から成っている作品 『夏木立』『怪談』
- ・ 江戸を舞台とした作品 『怪談牡丹燈籠』

(2) 加えた作品 『藪の鶯』（調査対象となる当時の女学生の会話が豊富に使用されているので。）

(3) 置き換えた作品

『はやり小唄』→『魔風恋風』（いずれも小杉天外著）
（女学生、看護婦など、対象となる若い女性の話し言葉が豊富なので。）

3：『階層』については大橋隆憲（1971: 26-27）『日本の階級構成』岩波新書を参考にした。

これらの作品の女性登場人物が、女性特有の終助詞を使用していない理由について、いくつかのカテゴリーに分けて考えてみたい。

3.1.1 『安愚楽鍋』の三人の娼妓の会話

表2の左側は、小松(1988)の調査「江戸語と東京語の終助詞の男女差」の一部であり、右側は『安愚楽鍋』(仮名垣1871)の女性の話し言葉から終助詞を抜き出したものである。『浮世風呂』(式亭三馬1809-13)では男女が共用していた終助詞「ダネ」「ダヨ」「～サ」のいずれもが、「東京語」では男女に差がみられる。その中間の時期に創作された『安愚楽鍋』では、具体的にどうであったのかを調査した。

表2 『安愚楽鍋』に使用されている終助詞

終助詞	浮世風呂	東京語	『安愚楽鍋』			
			歌妓	娼妓	茶店女	合計
ダネ	男女	男	1		2	3
ダヨ	男女	男	4		4	8
～サ	男女	男	3	4	5	12
ワネ		女	6 (ハネ)	1 (ハネ)	1 (ハネ)	8
会話量			30	21	63	114

* 「会話量」は文節の数を示す。

『安愚楽鍋』の三人の登場人物に共通して見られる「ダヨ」「ダネ」「サ」は、表の左側に示す東京語では、いずれも男性使用の終助詞となっている。またここで使用されている「ハネ」は、次頁①③④の例から判断して、東京語の女性の上り調子の「ワネ」²⁾というイントネーションとは異なり、下さりのややつき放した「ワネ」³⁾ではないかと考えられるので、女性独特の文末表現と見做さないことにする。すると、この三人の会話には、のちの「東京語」で女性専用とされる終助詞は一つもないということになる。

以下に、三人の会話の例を示しておく。

おいらん あくものぐい
「娼妓の密肉食」: 24,5才の娼妓と女中の会話から (以下、全て下線は筆者)

①---質にやるものハ(略)着がへまで おきつくした処ざますから 五両どころか壱分のさんだんも できゃアしないハネ (p. 146下)

②---おそくなりや人力車があるから びくびくおしでないヨ (略) わちきや せかれてゐるんざんす (p. 147上)

「^{げいしや}歌妓の坐敷話」：28、9才の歌妓とその客：^{みの}巳之どんとの会話

③---いまの わかいげいしやしうハ ふざけてるハネ ちつと おきやくに からかハれると なきだしたり (略) それで げいしやも ねへもんだハネ (p. 149下)

「^{むすめ}茶店女^{かくしうい}の隠食」：茶店女とその連れ

④ひき「---はじまりをきいて をちをきかないと 気になるハネ」 (p. 163下)

⑤ひき「そんなにわるく おいゝでない おばらさんはずつと乗込ンでゐるヨ
ヨ
ころ「まさかサ (p. 164)

いずれも客を相手とする仕事柄、客の接待には敬語や女性性を強調する言葉遣いが用いられるのでは---と考えられるが、上記、三つの例文からは、敬語については「(びくびく)おしでないよ」「(そんなにわるく)おいゝでない」といった程度のもの。また、文末辞には「ざます/ざんす」がみられるが、女性特有の終助詞はほとんど認められない。

しかし、幕末の遊里の言葉には、既に女性特有の終助詞の使用が盛んに認められる。「日本の女性言葉は時代が進むにつれて成立した」(金田一1988:39)という説に逆行するかに思われるこの現象には、どのような原因があるのだろうか。試みに、『安愚楽鍋』以前の幕末の人情本から遊女たちの話し言葉を紹介してみよう。話し言葉を忠実に写し取ろうとした滑稽本の登場以降、これら幕末の人情本にも、実際の話し言葉が反映されていると考えられている。

『春告鳥』(為永1836-37)

薄曇(遊女)「ヲヤ ^{わちき}私^が何時、誰と喧嘩しましたへ。

そで(遊女)「鳥雅さんとサ

薄曇「そりやア 昔の事ざんすは。

そで「ヲヤ 昔のことざますエ。昔の事が去年ざますか。(p. 521)

『花暦封じ文』(朧月亭1866)

大吉(女郎)「愚痴な事を言うふやうざいますが 眞實に主やア 私^{わちき}を呼んでお呉んなはるんざいませうね (p. 347)

大淀(女郎)「おふざけなますな 屹度左だわ サア正直にお言ひなんし 搦りんすよ (p. 347)

上記の『春告鳥』と『花暦封じ文』の創作年の差は、わずか30年である。それにもかかわらず、両者の作品の遊女・女郎たちの言葉には、明瞭な差が見られる。前者の「～ざんす/ざます」に対し、後者は「～ざいます」「～なんし/なます」といった文末辞を使用している。前者の「ざん/ざ」に対して後者は「ざい/な」と、やや柔らかい響きになっている。また、終助詞としては、前者の「へ」「とサ」「は」「エ」などに対して、後者は「ね」「だわ」「よ」などが使用されており(網掛け部分)、明治後期の漱石の描くヒロインたちにも似通う柔らかい終助詞になっている。このような特徴は幕末の人情本に共通してみられるもので、時代が下るにつれて女性的な特徴を強めてきている。遊女のみならず、ここに挙げた二作品の中の町娘の言葉遣いも、上例のような女性特有の終助詞の使用については遊女と変わらない。それは、この遊女たちの話す言葉が、「一般町家の町娘の女性語を基盤とし、絶えず互いに影響し合っていた」(真下1966: 9) からだといえよう。

遊里では、「わ、よ、ね」などの「女性らしい」柔らかい響きの終助詞の発達を促すと同時に、「客に対する強い待遇意識」(真下1966: 3) から、常に、強い尊敬や丁寧や謙遜の気持ちを含む表現を心掛けていた。また、格の高い遊女たちは、「肉体的外面的な美に加えて、精神美もかねそなえて」(杉本1985:216) いることが要求された。彼女たちは遊里語の習得をはじめ、磨き抜かれた芸や、客と対等に渡り合えるほどの古典・作歌・漢書などの教養を持つ存在であった。しかし、このような格の高い遊女とは違い、『安愚楽鍋』

の娼妓たちは、「金で肉体を売る単なる売笑婦たち」(杉本1985:216)で、教養とは無縁の環境にあった。「女性特有の終助詞」と「待遇表現」を使いこなすこと、これは遊女のステイタスを表すものでもあったのだ。

『安愚楽鍋』と同じ下流の娼婦のカテゴリーに属する『歌行燈』(泉1910)のお三重にも触れておきたい。お三重は、継母に売られ、苦界で虐待に喘ぎながらも、凡人には測りえないほどの至高の芸を身に着けていたという設定である。そのため、女性特有の終助詞はほとんど使用していないものの、以下のような「遊ばせ言葉」を使用することで、品格を備えた人物に表象されている。

「芸者でお呼び遊ばした、と思ひますと(略)お役に立たず、決まりが悪うございまして――」(p. 58)

遊里では、「わ、よ、ね」などの「女性らしい」柔らかい響きの終助詞が発達したが、その他の「アリンズ詞」のような多分に人工的色彩を加えた文末辞も含めて、特殊な話し言葉の体系が形成されるためには、その母体としての「集団」が必要である。さらに、今日のようにマスメディアが発達していなかった時代に、その言葉が一般女性に影響を及ぼすためには、その「集団」が発信力を含めて、ファッション・リーダーとしての魅力を備えている必要がある。(明治時代の「てよ・だわ言葉」も、都会の「教養ある」、新時代のヒロイン:「女学生」が発信したものであったということで、これと同じ条件を満たしているものとする。更に、室町時代の「女房詞」についても同様である。)

3. 1. 2 『たけくらべ』『十三夜』の会話から

「てよ・だわ言葉」と言われる「女学生言葉」は、明治中期ごろから徐々に普及・拡大されていったが、その頃創作された樋口一葉の作品には、大人にも子どもにも、このような女性専用の終助詞は見られない。

『たけくらべ』（樋口1895）——子どもたちの会話

これは、明治20年代の東京の下町を舞台に、思春期前の少年少女たちの淡い恋模様を描いた作品である。以下は、初潮をみて、自分の将来への漠然とした不安にふさぎ込む美登利と、彼女を慕う幼い正太との会話である。

正太：美登利さん、どうしたの。(略) 己^おれは お前に怒られる事はしもしないに、何がそんなに腹が立つの。

美登利：正太さん、私は怒つてゐるわけではありません。

正太：それならどうして。(略) (p. 100)

美登利：帰つておくれ、帰つておくれ、いつまでも此処に居てくれればもう友達でも何でも無い。厭な正太さんだ。(pp. 101-102)

『十三夜』（樋口1895）——人妻と元恋人の会話から

夫の仕打ちに耐えかねて実家へ帰ったお関は、親に説得されて婚家へ戻ることになったが、帰途、拾った人力車は、偶然、昔の恋仲の録之助が引いていたものであった。その別れの場面での二人の会話である。

お関：録さんこれは誠に失礼なれど鼻紙なりとも買つて下され。久しぶりにお目にかかつて何か申したい事は沢山あるやうなれど口にだせませぬは察して下され、では私は御別れ致します。(略)

録之助：お辞儀申す筈なれど貴嬢のお手より下されたのならば、あり難く頂戴して思い出にします(略) ---私も帰ります、更けては路が淋しう御座いますぞ。(pp. 68-69)

『たけくらべ』で女性語の使用が見られなかったのは、「女性性」とは関わりの薄い、下町の思春期前の子供たちであったということが考えられる。

『十三夜』では、主人公の人妻お関が昔の恋人に偶然会った場面で、男女共に丁寧な言葉遣いをしている。女性特有の終助詞は私的な日常会話、つまり親しい者同士の会話に現われやすいということを鑑みると、この場面で女性的な文末辞が使用されていないのは、この二人の精神的距離を表しているからといえるだろう。それに、何より一葉の文体の特徴は擬古文といわれる「雅俗折衷体」で、会話文においても括弧が用いられていないし、忠実に会話を

模写しようとしていた当時の写実主義作家たちの試みとは別のところで研鑽された文章なのである。

3.1.3 『武蔵野』(国木田1898)と『徼』(徳田1911)の老女の会話から 『武蔵野』の茶店の婆や、『徼』の手伝い婆などの下流の老女にも、女性特有の終助詞はみられない。

『武蔵野』茶店の婆さん(語り手の「自分」へ)

「今時分、何しに来ただァ」「桜は春咲くこと知らねえだね」(p. 21)

『徼』手伝い婆(主人の笹村へ)

「いえ、私は一枚で沢山でござんす、もう暑ござんすで---。」(p. 200)

老女に次いで、中年の既婚女性の例として、『浮雲』(二葉亭1887)の下町育ちの後妻(お政)、『火の柱』(木下1904)の後妻(お加女)、『五重塔』(幸田1891)の大工の妻(お浪)が挙げられる。お政、お加女は結婚によって階層が一ランク上がってはいるものの、下流の出身である。また、お浪は大工の女房である。いずれも夫との会話では敬語を使用しているが、女性特有の終助詞はほとんどみられない。特に「元俳優」であったというお加女の「～まさァネ／～ませんやネ」といった伝法な文末辞は、当時、接客業の芸者などと同列に見られていた「俳優」の社会的な地位を表しているといえよう。

『浮雲』お政(主人公の省三へ)

「へーそんな事を云っておよこしなすったかい(略)---」(p. 48)

「エ御免におなりだとエ、オヤマどうしてマァ」(p. 56)

『火の柱』お加女(夫へ)

「忌なら忌でも可御座んすサ、只だ其の言ッ振が癪に障りまさァネ(略)

「我夫、てんで譯が解つたもんじやありませんやネ(略)」(p. 32)

『五重塔』お浪(夫へ)

「まあ滅相な、緩りと臥やすむでおいでなされ(略)。今日はとりわけ朝風の冷

たいに、破傷風にでもなつたら何となさる」(p. 74)

上記の例には敬語はみられるものの、女性特有の終助詞の使用がほとんどみられない。それは、彼女たちの属する階層や、教養・「女らしさの規範」の希薄さなどとの関わりを示しているといえるだろう。

3.1.4 『外科室』(泉1895)——伯爵夫人と看護婦の会話

泉鏡花の『外科室』は樋口一葉の『十三夜』と同時期に創作されている。この作品の伯爵夫人と看護婦の会話にも、以下に示すように女性語は見られない。引用の会話は、手術を前にした夫人が麻酔をかけたくないと言い張り、また、執刀医がかつての恋人であることを確認している場面である。

看護婦：それは夫人、いくら何でもおくさま些少ちつとはお痛み遊ばしますから爪をお取り遊ばすとは違います。

夫人：刀を取る先生は、高峰様だらうね！

看護婦：はい、外科科長です。いくら高峰様でも痛くなくおきり申すことは出来ません。

夫人：可いよ、痛かあないよ。 (pp. 133-134)

明治中期の上流階層の女性は、「てよ・だわ言葉」を品のないものとして、その使用を避けたといわれているが、ここでも伯爵夫人の言葉にそれはみられない。手術前の緊迫した状況ということと、相手が「格下」ということもあってか、かなりぶっきらぼうな物言いとなっている。夫人の品格を示すものとしては、夫に対しての「もう、御免下さいまし」(p. 119)「存じております」(p. 120)といった尊敬語や謙讓語が見られるくらいである。

一方、看護婦の方は、患者が身分の高い夫人でもあることから、始終、丁寧な敬語で対応している。それにもかかわらず、専門職に就く女性としての毅然とした断定的(あるいは命令的)な口調となっている。

すなわち、一人はこの頃の上流階層の既婚婦人の習性から、もう一人は職業上・身分上の立場から、女性特有の終助詞が見られなかったといえる。

3.1.5 『土』(長塚1910) ——農婦たちの会話から

『土』は茨城県の小作農の貧しい生活をリアルに描いた農民文学の記念碑的作品である。以下の引用は、仲間の葬儀の後の農婦たちの会話である。

「どうしたっけまあ、酷く棺おけ ぐらぐらしたんじゃ なかったっけえ」

「その筈だんべな、後が心配で仕ようがなえ私は ああいに動くだちぞ、おめえ」(略)

「おお厭だ 俺ら」(pp. 42-43)

『土』は20世紀初めの作品ではあるが、「ぜ」や「～しな」が元気のいい女性によって使われていた19世紀初頭の滑稽本『浮世風呂』同様に、話し言葉に男女差が全く見られない。引用した部分だけを読んだら、話し手の性別は分からない。明治末であっても、また東京近郊であっても、舞台が農村である限りは男女の言葉にそれほどの差はなかったのである。「男女のことばの区別は、戦前、都会地でこそやかましかったが、農村、漁村などではほとんどなかった」(金田一1988:38)。そこでは、前近代的な土地所有を基盤とした生産労働と家内労働が同時に行われており、今日的な意味での「性別役割分担」が存在しなかったからだといえよう。また、農村の女性の地位は、その労働の重要性故に、男性に近いものであったことも男女の言葉に差異がみられなかった理由と考えていいだろう。新渡戸(1908:159)は言う。「不思議なことに、社会階級が低くなればなるほど、例えば職人の世界では、夫と妻の立場は平等であった。また、もっとも身分の高い貴族の場合でも男と女の差異はあまり目立たなかった。その原因はおもに、有閑階級であった貴族たちが、文字通り女性化したので、性の差異を際立たせる機会がほとんどなかったからである」と。

この言葉に従えば、男女の言葉に差異を生みだしているのは、階級の上下であるよりも、男女の在り方(「性別役割分担」という男女の分業システムの存在、そして、その状況が生み出す「経済力のある者と、それに依存する者」という不平等な関係)ということになるのではないだろうか。

3. 1. 6 『何処へ』(正宗1908)『田舎教師』(田山1909)『お目出たき人』(武者小路1911)『網走まで』(志賀1910)——母と息子の会話

それでは親子(ここでは母と息子)の場合には、女性語と敬語はどのような状況の元で、どのように使用されているかをみてみたい。

『何処へ』——母と成人した息子(雑誌記者)

息子「皆なもう寝たんですか。」

母「あ、もうもう二時間前から寝てらあね。それにお父さんは風邪だといつてね、お夕飯が済むとすぐにお休みさ。」

母「お前、織田さんがお出でだよ。何か用事がおありのやうで、大分待つてゐなすつたがね。」 p. 37

『田舎教師』——母と成人した息子(教師)

母「まア清三かい」「まア、雨が降つて大変だつたねえ！」

息子「雑巾では駄目だよ。母^{おつか}さん、バケツに水を汲んでくださいな。」 p. 24

『お目出たき人』——母と成人した息子(学習院卒の道学者)

母「中々出来ると見えるね。」

息子「さうと見えますね。」

母「あのことが早く決まるといゝね。(略)早く決まるといゝと思つてゐるのだ。」 p. 58

『網走まで』——母(26, 7歳)と息子(7つばかり)

母「ここは暑^{あつ}ござんすよ。」

息子「暑くたつていいよ。」 p. 25

母「困るのねえ。」 p. 26

母「その下にドロップが入っているからおあがんなさい。(略)ドロップでもおいしいのよ。」 p. 28

母→語り手へ「御免遊ばせ。」 p. 29

最初の三つの例では、母親は息子に対しては敬語も女性語も使っていない。一方、いずれも高学歴で専門職に就いている成人した息子は、母親に対して

敬語を使用している。それは年齢的な序列、あるいは「親」に対する規範的な敬意の表れと考えていだろう。

ところが、『網走まで』では七つの息子（どうやら知恵遅れであるらしい）に対して、母親は敬語と女性語を用いている。その容姿・衣装から、結婚前の華やかな姿を思い浮かべる「語り手」の目を通して、この若い母親が教養ある中流以上の階層に属しているらしいことが示されている。しかし階層については、他の三つの作品においても、母親はいずれも中・上流階級に所属しているのだ。異なる点は、最後の作品のみ、話し相手の息子が「子供」であり、従って母親が「若い」ということである。そこで、作者は新しい時代の若い母親の表象を試みたものと思われる。このことから、当時においては母親が幼い息子に女性語や敬語を用いるのは、未だ少数派であったと考えられるのではないだろうか。

3.2 女性特有の終助詞が使用されていない理由

これまで、女性特有の終助詞が使用されていない登場人物の会話と、話者の状況を考察してきたが、それらを纏めると次のような傾向が認められた。

- (a) 「教養」ある「集団」と関わりのない環境下にある女性の会話
- (b) 「女らしさの規範」と関わりの希薄な環境下にある女性の会話者
(下流の思春期の子供・老婆など)
- (c) 疎遠な関係、あるいは遠慮のいる関係の男女の会話
- (d) 「てよ・だわ言葉」を下品なものとしていた時代の上流階級の女性の会話
- (e) 就業中（おもに専門職）の女性の会話
- (f) 第一次産業中心で男女の分業・分担が不明確——従って「性別役割分担」意識が希薄——な社会・地域での会話
- (f') その地位が男性と対等に近い環境下にある女性の会話
- (g) 母の息子への会話（ただし、例外もあり）

これらが表1の左側の作品群から導き出された、女性特有の終助詞が使用されていない（または、極めて少ない）状況と考えられる。それならば、右

側の作品群には、これらとは「逆」の理由が存在することになる。そこで、今度は右側の作品群が、上記(a)～(g)までの「逆」の条件を満たしているかどうかを確認してみたい。(以下、その逆の条件を示すものとして、文字の前に「+」表記を入れることにする。)

3.3 女性特有の終助詞を使用している登場人物についての考察

右側の「女性特有の終助詞を使用している作品」を一見してわかるのは、女性特有の終助詞の使用者が、「女学生」を中心とする「都会に住む中・上流の女性」であることだ(+a) (+b)。表に挙げた31人の話者のうち、『高野聖』(泉1910)の「妖怪」と、『吾輩は猫である』(夏目1905)の「猫」を除いた話者は29人。そのうち、女学生、元女学生、あるいは学校教育を受けたとみなすことができる者は24人で約83% (残り5人は教育を受けたか否かは、作品からは分からなかった)。

女学生たちの話し言葉に「遊ばせ言葉」を含む「敬語」と、「てよ・だわ言葉」を含む「女性特有の終助詞」が多いのは、表にみるとおりである。彼女たちは、上流の女性が「品のないもの」として使用しなかった終助詞も、新興の中産階級の故に、活きのいい、仲間内でのジャルゴンとして躊躇なく使用していたのであろう。

この「てよ・だわ言葉」の使用者は、明治30年以降、徐々に中流から上・下流にも及んでいる。その年齢層も少女や若い女性から人妻へと広がっている。このことから、この言葉が社会に容認されていったことが分かる (+d)。

「公教育」は常に体制側を利するように、その享受者をコントロール下に置こうとする。「てよ・だわ言葉」は発生当時、「良妻賢母像をさりげなく無化してしまう」(本田2012: 98)女学生たちの無意識の抵抗であったとしても、女性特有の表現であったという点において、「女性語」の範疇に収まってしまった。それ故、表からも窺えるように、皮肉にも明治30年代ごろからは、逆に、「女らしい」言葉遣いとして広く普及・定着していった。

このような女性語の普及・拡大を促進していった背景には、明治20年以降の日本の資本主義社会の発展に伴う豊かな中産階級の興隆、市民社会の成熟

という社会の変化があった。都会には賃金労働者である夫と、家事に従事する妻というカップルが増え、そこでは「性別役割分担」という男女の分業が進行していった(+f)。その活動領域の違いが、実務的な内容重視の男性の会話と、「女らしさ」を強調した女性の会話といった両者の差を拡大させていった。また、賃金を稼ぐ夫に対し、無償の家事労働に勤しむ妻は、自ずと夫に経済的に依存せざるを得ない(+f')。それが、女性の側により丁寧な敬語の使用を求めるようになったと考える。さらに、明治新政府は、女性を憲法と民法で二流市民に貶める⁽⁴⁾ことによって男性の下に位置づけたが、これは(+f')的状況を法によって決定づけたものであった。このように、資本主義の発展(下からの産業構造の変化)と、明治政府の中央集権国家のコントロールの強化(上からの変化)という上・下の社会構造の変化という状況の下で、明治30年代以降、女性語は拡大・普及していったものと考えられる。

その他、今回の調査では具体的に現れなかったが、「女性語形成」の要因としては次のような事項が挙げられる。

(+h) 明治政府の教育政策による強力なジェンダー統制

—男女によって異なる科目・内容・レベルの実施など

—国語教育(読本・文法など)における「女性語」の導入・指導

(+i) マスメディアの急速な発達

(+j) 明治30年代後半からの女学校数の増加、及び、義務教育の普及⁽⁵⁾

特に、女性向けのおびただし雑誌の発行、高い就学率によるリテラシーの向上も、「役割語」⁽⁶⁾としての女性語の普及・拡大に欠かすことができない社会的要因といえる。

4. おわりに——女性語の今日的状況と今後の課題

日本の女性語は、これまで述べてきたような「特殊な社会的状況」の中で育まれて、現在のような形に変化してきたものといえる。なお、これまで示してきたような、女性語使用/非使用の状況の分析は、それぞれの作品が書かれた時の社会的状況ではあるものの、主に(f)で示したような産業構造という下部構造の基盤の上に、その他の要因(上部構造的条件)が派生している

ものと考えている。従って、これまで述べてきた女性語の形成要因は、だいたいにおいて今日にも当てはまるものと考えている。

それ故に、民主憲法を戴く戦後も、女性語が存続していることについては、「男女の不平等の状況が女性語の形成を促進させた」という「認識」が、女性の自覚不足や識者の啓蒙不足であったということに留まらず、それは何よりも、社会の上・下構造とも深く関わって存在しているものと考えている。これを具体的に裏付ける、戦後の女性の話し言葉の変化に関する調査と、その状況分析については、今後の課題としたい。

注

(1) 日本女性の話し方の特徴としては次のような事項があげられる。

- ・丁寧語、美化語を含む敬語を多用する。
- ・「わ、よ、ね」など女性特有の終助詞を多用する。
- ・一人称として「わたし、わたくし、あたし」などを用いる。
- ・婉曲表現や言い切らない表現、「あら、まあ」などの感動詞を用いる。

など。

(2) 作品の抽出に関しては、表1の注1参照。

(3) 終助詞「てよ・だわ」をはじめ、同種の終助詞を二つ以上重ねたもの（「わよ・わね・よね」etc.）を「てよ・だわ言葉」に入れた。

(4) 明治時代の女性は、政治的には「選挙権を持たない」二流市民、経済的には「財産権を持たない」存在で、民法には「無能力者」と明記されていた。

(5) 『日本近代教育百年史第4巻 学校教育2』（国立教育研究所1974:1008）によると「明治38年の女子就学率は93.8%」となっている。

(6) 小説の中で、人物を表象する際に典型的な言葉遣いを使用すること。金水敏(2003)『役割語 ヴァーチャル日本語』岩波書店 参照。

参考・引用文献

阿部圭子(1998)「もともと性差のある言語—言語の性差の多重構造」『月刊言語』27-5
pp. 72-76 大修館書店

泉鏡花(1895)『外科室』（『日本近代文学大系7 泉鏡花集』角川書店1970）

泉鏡花(1910)『歌行燈』(岩波文庫1984)
隴月亭有人(1866)『花暦封じ文』(『繪本稗史小説第十一集』博文館1920)
仮名垣魯文(1871)『安愚楽鍋』(『明治文学全集1 明治開化期文学集(一)』筑摩書房1966)
木下尚江(1904)『火の柱』(岩波文庫1954)
金田一春彦(1988)『日本語 上』岩波新書
国木田独歩(1898)『武蔵野』(新潮文庫1987)
幸田露伴(1891)『五重塔』(岩波文庫1984)
小松寿雄(1988)「東京語における男女差の形成—終助詞を中心として」『国語と国文学』
65-11 pp. 94-106 至文堂
志賀直哉(1910)『網走まで』(新潮文庫2011)
杉本つとむ(1985)「吉原の遊女と教養」『江戸の女ことば』創拓社
為永春水(1835)『春告鳥』(『新編日本古典文学全集80』小学館2000)
田山花袋(1909)『田舎教師』(岩波文庫1984)
徳田秋聲(1911)『薔』(『徳田秋聲全集9』八木書店1998)
長塚節(1910)『土』(新潮文庫1987)
新渡戸稲造(1908)『武士道』(岩波文庫1974)
樋口一葉(1895)『たけくらべ』(岩波文庫1984)
樋口一葉(1897)『十三夜』(岩波文庫1983)
二葉亭四迷(1887)『浮雲』(岩波文庫2011)
本田和子(2012)「宙吊りされることばたち」『女学生の系譜 増補版』青弓社
正宗白鳥(1908)『何処へ』(新潮文庫1998)
真下三郎(1966)『遊里語の研究』東京堂出版
武者小路実篤(1911)『お目出たき人』(岩波文庫1964)

(ほりえ みさこ・京都橘大学)